

酒を飲んで而も酒の過失を生ずること無量なり。若し自身の手を以て酒器を過して人に與へて酒を飲ましめば五百世手なからん。何に況んや自ら飲まんをや

とあります。大論には酒に三十五過あることを擧げられてあつて、酒の人を害すること實に身の毛も豎つばかり恐るべきものである。殊に酒の我身を禍ひすることの恐るべきは驚くの外はなきのみならず禍ひを子孫に及ぼし、子孫をして其の災禍に泣かしむることの不幸を想ひ遣る時實に慚愧に堪へない次第であらねばならぬ。彼の酒器を渡して飲ましむるさへ五百世の間、生れ變り死に變り手なし坊に生るゝと説かれてある佛陀の御心を推し測り奉るとき、佛陀の酒に對する御感じの深き、そして云何に眞面目なる御諭しであるかを深く感ずるので

ある。げにこれを想へば一たび口に入れた酒をも吐き出したい位であらう。どうか酒を用ゐて居る人はよくよく考慮して下さい。そして禁酒若くは減酒の方法を講じて、聊かにても禍ひを避くるやう心得られたい。尙ほ禁酒の事に就いては予が信仰講話に今より少し委しく記して置いたから、どうか一讀を願ひたい。

六、不説四衆過戒

四衆とは出家に比丘僧、比丘尼僧の二衆と、在家の受戒の男子を優婆塞と云ひ、女子を優婆夷と云ふ二衆にて、これ等出家在家の人を教團の四衆と云ふ。此の四衆は共に佛戒を受けて教團の和合衆に入つた人であつて、既に和合衆に入つた上は他の過失を擧げたり、これを他に傳ふるやうな振舞をなしてはならぬと誠しめられたのである。

大體教團内の四衆とはいへ、素より聖者でない限りは過失もあらう。處で妄りに其の過失を揚言したり、これを他に傳ふるやうなことは實に見苦しいことである。又假令教團の人でなくとも、他の惡事を説いて喋々する程聞き悪いものはなく、又それ程人に恨みを買ひ、惡感を含ませるものはない。

どうかお互に他の善徳や美點に對しては心の底よりこれを讚美することはよいが、若し何か缺點とか、よからぬ事とか云ふやうなことのあつた場合には素より與り知らざる風情を保つに如かずと存するのである。

言ひ換ふればたとひ他の過失を見るときもこれを見遁し、それを他に對してはどこまでも語るまいと堅く心に誓ひ、ちやうど御佛が、私の

罪惡、私の見悪い行ひを御覽になつても、唯慙念を垂れ給ふ外、別にとがめもせず、あばきもし給はないやうな心地の態度を持つやうになりたいと思ふ。

彌陀大悲の御心を領納せる心地よりは斯くなくてはならないのであります。そして此の不説四衆過戒でも矢張り慈心が根本道念とならねばならないと云ふことを心得られたい。

七、不自讚毀他戒

こは自分自身を賢いもの善いものとして自惚顔を爲し、高慢振りを發揮して、自ら高く標致ることである。小衲自らの心情、自らの態度のいかに憎らしい風情を帯びて居るかを知り得ないのであるが定んで見悪いことであらうと、時々は懺悔しながらも尙ほ慢病の癒えないの

は實に苦しいことであるが、こは小人凡夫の持病であつて、實に御恥かしいことであります。

彼の世の人を眼下に見下しながら廣言を吐き、宛も無人の境を濶歩するやうな態度を取るばかりか、人を侮辱するやうな顔色を作すのは是れ實に自ら其の人格の劣等なることを標示するのみならず、其の辱かしめに觸れたものは云何に恨みを抱くであらうか、こは畢竟自らの人格を引き下ると同時に、他をして云何に恨みの惱みに苦しましむるかを想ふ時、自ら反省して、自讃毀他の惡弊を除くことに勉めねばなりません。經に

菩薩は應に一切衆生に代つて毀辱を受け、惡事は自ら己れに向け、好事は他人に與ふべし、若し自ら己れの徳を揚げ他人の好事を隠し、

他人をして毀りを受けしめば是れ菩薩の重罪なり

とあります。こは菩薩とあるのは、佛陀大悲の光りを受けた人のことである。此の人は一切の人の辱しめらるゝことや、苦しい目に遇ふことを代つて受けて遣る人である。そして何んでも好いことであつたなら、それは皆他に譲つて自分は取らないと云ふ人ぢや。すべて悪い事は自分に負擔し、好い事はなんでも他へ他へと譲る人ぢや。自分の徳の光りとなることは兎角包み隠して見せないやうにし、そして人の徳に關することは何處までも顯彰することに力むるのである。それが眞個に戒を受けた、菩薩といはるゝ人の人格ぢや。げに斯様な人格にまで洗ひ揚げられてこそ彌陀大悲の光りを持つ人ともいはるゝのでありますから、此の邊をよくこころ得られたい。

八、不慳惜加毀戒

慳惜は慳吝とも云ふ心にて、俗にしわん坊と云ふ類である。すべて金錢衣服飲食等は勿論、菩薩ともいはねばならぬ身でありながら、一句の法、一微塵ばかりの法施さへせないと云ふ無慚愧の爲體にて、實に怖ろしいしわん坊と稱せらるゝ人間である。古迹に

菩薩の本願は有情界の爲めに生死の身を留む、既に身すら衆生に屬す況んや財物をや

とあります。菩薩戒を持つ菩薩は衆生の爲めには身命をも投げ出して居る。斯く身命さへ投げ出して居る菩薩の同法に對しても慚愧に堪へないではないか。實に身命さへ衆生のものとす、まして金錢をやぢや。それに貧に迫りて飢寒に泣いて居るものを見ても施さず、精神的

光りを持たない無信仰の人に對しても、毫も法を施したいと云ふ心も發らず、唯貪欲心にほだされて居る心理状態の淺間しさ加減は實に言語道斷の至りぢや。世人よりしわん坊／＼と呼ばれても何等慚愧心の發らないと云ふのは實に悲しむべきことではありませんか。

又世には慳吝一途の人間が居る。彼れは云何なる貧しいものより救ひを求められても一滴の涙もなく、勿論一錢の助成をもせない。強ひて請へば、一片同情の言も與へず、却つて働かないから貧乏するのぢやの、身持ちが悪いからぢやのと辱しめたり、罵つたりするのであります。今火のついたやうな場合に臨んで、叱つても罵つても仕方がないのみならず、却つて彼をして憤怒を懷かしむる許りである。

經に一錢一針一草をも施さず、一句一偈一微塵許りの法をも説いて

聞かせないのみか、反つて先方を罵り辱しめることは實に無慈悲なことであつて、罪の輕からぬことであると説かれてゐるのは實に其の通りぢや。どうか誰も佛陀慈心の光りに觸れ、そして佛陀の掟を受くる人は能く此の不慳惜加毀戒の教訓を遵守して、第一慈心を以て及ぶ限り物をも施し、法をも説いて聞かせたいと云ふ心になつて貰ひたい。

九、瞋心不受悔戒

こは何か感情の衝突に依り、一方は非常に立腹して居る。處で相手方は大に悔いて、わるかつたと懺悔し、どうか堪忍して呉れよと罪を謝して居るにも拘らず、どうしても堪忍は出來ないと云うて、瞋恚の焰を燃やして居ることを誡められた戒である。

納が小僧の時分であつて内容の事情は知らないが、或る所でこんなことがあつた。一方は婿の父なり、一方は嫁の父であつた。兩人が何か行違ひの廉から非常な言ひ争ひをした。そして嫁を引き取るとか返すとか云うて言ひ争うた結果、終にもものわかれとなつた。そこへ或る人が仲に入つて和解に盡力せられたが、兩方とも一步も譲らず極めて強情であつた。最早これ限りと云ふ所に至り、和解者のいはるゝには、其許等御兩人は、素より世の道理も解し、且つ一方貴殿は佛法の教へも御存知の方であつて、いはゞ釋迦に説法ではありませんが、彼の彌陀の御本願に、觸光柔輦の願と云ふのがあつて、彼の彌陀の慈光を頂いた人は、身も心もおだやかになつて、三毒の煩惱も消ゆるとあるさうですが、どうか御兩人とも、此の御佛の思召を想ひ遣つて下されと申された時、一方の老人は直に頭を下げながら、嗚呼濟まなんだ私が悪

かつた、どうかもう堪忍して下されと非常に慚謝した。そこで對手の老人も、氣拔けのしたやうに、嗚呼いらぬことを云うて濟まなんだ、先方を立腹させたのは此の方ぢや、嗚呼濟まなんだ、どうか容赦して下されと謝しました。従つて相互に心を和らげ共に元に還つて事濟みになりました。此の事を見もし聞きもして居る私は非常に感じて居ます。それは彌陀大悲の御心を受ければ、云何なる心も和らげらるゝのである。これを思ふ時、彼の光秀が

心しらぬ人はいかにもいはゞいへ

身をもをしまさず名をもをしまさず

と毒氣を吐いて主君信長を弑し、身は山崎の一戦に滅びて、主殺しの悪名は後の世まで傳へらるゝに至つた。こは種々の事情の然らしめ

たことではあらうが、若し此の人達に、一片信仰の光りがあつたなら、それは彌陀大悲の光りが少しでも加はつて居たなら、あのあさましい暗闘はなかつたであらうにと想はるゝのである。

誰でも瞋恚の焰の燃え立つた場合には、假令先方が云何にわるかつたと謝しても、普通では容易に心を和ぐると云ふことは困難なことであらう。けれども其の出来にくい堪忍をするのが、我等大悲の戒體を受けて、菩薩の仲間入りをしたものゝ本分であるのぢや。そは先方に對して堪忍してやると云ふ心地でもなく、又自ら努めて堪忍するのでもなく、いはゞちやうど雨後の月の輝けるが如く、心に何の思ひ懸りもなく、げに心廣く體胖な心地になつてくるのである。經に

前人悔を求め、善言を以て慚謝すれども猶ほ瞋つて解けざるは是

れ菩薩の重罪なり

と説かれてあります。どうか皆さん、彼の一戒光明の大悲の御心を受け入れて、身も心も麗はしい和らかな人になつて下さい。

十、不謗三寶戒

三寶のことは別に記して置いたから、こゝでは略して置きます。要するに三寶歸依の極致は、佛陀に歸命し奉ることに極まるのであります。

譬へば佛は燈火の如く、法は提灯の如く、僧は提灯持ちに似て居る。青年でも、老人でも暗夜の道に光りはいらぬ、提灯は無用のものぢやと云ふものはあるまい。假令晝の中に提灯は用ゐずとも、暗夜には必ず入用であると云ふことを思ふ時、これを大切に保存して置くの必要

がある。人生に信仰の光りを要することは實に暗夜に提灯以上であらうと思ふ。然るに暗夜の光りは(佛)いらぬものぢや、提灯は(法)無用ぢや、提灯持ち(僧)などの世話はいらぬことぢやと云ふのと同じこと、こんな人を三寶を誘ふ人と云ふのである。處で今は既に三寶歸依の人として、心中に大悲の光りを持ち、止惡修善利生の明るい道を踐む人となつたのであるから、此の人にして三寶を誘ふと云ふやうなことは萬々ない筈であります。萬一これありとせばそれは戒を捨てた人であり、信仰の光りを失うた人であります。

どうかどなたも彌陀大悲の一戒光明の光りに依つて三聚淨戒の道を開き、即ち日夜止惡修善利生の心地を以て、十重禁戒の實踐に勉むるやう切望いたします。

二十二、四 恩

四恩とは父母、衆生、國王、三寶、の恩と云ふことにて三聚淨戒の中の攝善法戒に屬する善徳のことである。そして此の四恩の事は心地觀經報恩品に委しく説かれてあります。

大體人間道德の根本を、慈悲とか仁とか愛とか説かれてありますが、要するに慈心の光りに外ならないのである。これを普通には、恩義、恩徳、恩澤など、いはれてあつて、一般道德的の標語となつて居る。恩はめぐむと云ふ字であつて、彼の雨露の草木を潤し、太陽の萬物を暖むると同じ心地である。

若し天地の間に雨露の潤ひがなかつたなら、草木を始め、人類鳥獸等すべてのもの皆枯死して仕舞ふであらう。若し太陽の暖かみがなかつたなら、萬物悉く冷却して仕舞ふであらう。想ふにすべての人が此の天地の間にあつて日夜太陽の暖味を受け、彼の雨露の潤ひに浴して生存しつゝあることを歡ばぬものはあるまい。此の意味に由り、我等が最も手近い所で、最も手厚い暖味と潤ひを受けつゝあることを教へられて居るのが所謂四恩と云ふ教訓である。

一、父母の恩

四恩の第一は父母の恩にて、觀經には三福を説きて、其の中の第一は孝養父母である。梵網經には孝順は至道の法なりと説き、孔子は孝を人道の根本として教へ、教育勅語には先づ父母に孝にと仰せられてある。こは何れも皆家庭の道德を教へられたものである。處で此の孝

の由つて來る源は何れに在るかと言ふに、それは慈心であります。慈心が根本となつて、そこに發露し來つた至誠の奉仕を眞實の孝と言ふのである。善導大師の語に

慈心相向佛眼相看

と云ふ教訓がある。これは慈心と言ふやさしい心を以て親に向ひ、佛眼と言ふやさしい眼を以て親を見ると云ふことにて、親に孝行と言ふ根本の道念は慈心と言ふやさしい心であるとの心地である。若し此のやさしい心の一つを缺くときは孝の意義はなさないのであつて、彼の雪中に筍を尋ね、氷を擽いて魚を求むる眞似をしても根本の道念たる慈心の一つがなかつたなら、筍そのものに何の暖かみもなく、魚そのものに何の潤ひもなきものとなつて甚だ親しみがたく、且つ寄りつき

にくいものになるであらう。つまり慈心ぢや、やさしい心ぢや、此の慈心一つが暖かいのぢや、潤ふのぢや。

皆さん、慈心は人間道德の根本となるのであつて、獨り親に對する心地ばかりでなく、夫婦相和することも慈心が本であり、兄弟相互に親しむことも慈心が源とならなければ眞實の親しみを保つことは出来ません。斯の如く何れに向つても慈心の潤ひを以て向ひ、慈心の暖か味を以て相對すれば人皆これを歡び、特に親達はどれだけ嬉しく受け容れて満足してくれるであります。

私は思ひます。彼の太陽の大きな光りに暖められて歡ぶ人や、雨露に潤されて生ひ立つて行く人、即ちこんな慈心にめぐまるゝ親子を主とした家庭を造るやうな人を見たい、それは一家和合の園に生ひ立つて

行く人格者を見たい、私の家庭がどうかさういふ様な風情にありたいと云ふ希望を持つのである。従つてこんな家庭の親達はどれだけうれしう思ふでせうか、そはどれだけ其の子のやさしい心の潤ひを喜び、やさしい心の暖かみに満足することでありませう。人間道德の慈心の光りは先づ此の家庭に輝くのが眞個の人の道であります。

二、衆生の恩

言ひ換ふれば人の恩と云ふことである。人といへば朋友知己隣里郷黨の人々は申すに及ばず、古今東西の人々のすべてを指すのであつて、そして此等より受くる所の恩徳は實に多大なものであります。

先づ差當り私の着て居る着物の綿は遠い印度あたりの人の勞力から出來たのであり、袈裟や衣は、日本の養蠶家製絲家染工織工等多人數

の勞力に依つて出來て居る。それから人造絹絲製作家の勞力に出來たものもあれば、其の外英國あたりの毛織物、又は獨逸あたりの染工家の頭腦を煩はした染色ものもあります。そこで問題は衣服と云ふ一條に關することだけであるのに、斯様に遠近の國の人々に依つて、私に寒くもなく、左程見苦しくもない程の衣服を身につけることを得ることを思へば、私は實に見ず知らずの異國異境の人々の勞を謝せねばならぬ譯である。若し此等の恵みの施しに預からなかつたなら、私は此の服裝を身につけることが出來ないであらうと思へば私は此等異國異境の人々を他人とは思へない譯である。そは皆恩人であるのぢや。それから私は、汽車汽船電車自動車などに乗つた刹那、いつも思ひ出すのは、あの蒸氣發明家の苦心や、機械の發明構造等の勞苦などを

思ひ遣る時、幾度か深い思ひ入れを以てありがたう、ありがたうと感謝するのであります。それは彼の發明者功勞者のやうな努力に依つて、人類に及ぼす恩徳がなかつたなら、私等今こんな便利を得ることは出來ないのであるのに、斯る便利と快感に充たさるゝことを得るのは全く人の御蔭であると深く感謝の念を捧ぐるのであります。さてこんなことを思ひ浮べて見ますと、日常生活の住宅飲食等何から何まで人類の恩恵に依らないものはない。それは何一つとして感謝に値せないものはない。

それから特に宗教哲學文學政治經濟等の智能を開いて、人類の燈明となつた、釋迦基督孔子等の聖者哲人等の人類に與へられた廣大なる恩徳を想ふ時、私は實に驚きの態度を以て感謝するのであります。

従つて私は師恩や朋友知己の私を扶持して呉れたことや、指導啓發して呉れたことをつくづく思ひ浮べて、非常にありがたいことであつたと感謝せらるゝのであります。それでも其の若年の當時は左程の感謝を捧げ得なかつたのは實に遺憾の至りであります。私は思ひます。私は貧農の家に生れて、山に行き田に行きて働くより外に何等の術も知らない境遇に生ひ立つたのであるが、彼の尊い佛の御導きに依り、御法を聞き、五重相傳などに與るやうな因縁から出家得度の身となり、漸くにして今日此に至つて居るのであります。此の間には多くの師友知己の開導と其の扶持を受けて居ることを深く感謝して止まないのであります。そして私の荷うて居る恩徳は實に荷ひ切れない程の重さであります。どうか幾分なりとも報謝の道を盡したいと思つて居る

のであります。

けれども其の事を語るのは今暫く差控へて置きます。どうか皆さんに於いても同様のことゝ存ぜらるゝまゝ、大に衆生恩に報じて下さるゝやう切望致します。そは各々分相應に、其の道と器量に應じて、世の爲め人の爲めに努力することでありませう。

三、國王の恩

こは皇恩のことであります。心地觀經に

國王は殿堂に於ける柱の如し

と説かれてあるのは實に其の要を得た金言であると存じます。そは殿堂は柱に依つて持たれて居る。従つて此の柱が傾いたり、朽ちたりと云ふやうなことになるれば自然其の家は壞れて來て、人の住居するこ

との出来ないやうになつて來ると同じことで、國家の主腦たる主權者が輕々しく異動したり、又は在つたものをなくして仕舞ふと云ふやうなことになるますと、國民の全體は非常な不安を感じ、到底安堵して生活を全うすることは出来ません。ちやうど柱の朽ちた家の何時倒壊するか知れないと云ふ不安に充たされて居ると同じことで、彼の主權者が一定せずして常に動搖不安の状態に置かれてある支那はどうでせう。肝腎な國の柱がぐら／＼して居る結果、彼れ國民は申すに及ばず、交際國の人々にまで常に不安の感を抱かしめて居るではありませんか。

それに比べますと我國はどうでせう、二千五百八十餘年皇統相次ぎ、國家を統治し給ふ柱の動きなき風情の根強き力に安堵せる國民は眞に

御親とも君皇とも仰ぎ奉ること、全く家に於ける柱の如く大切に尊重し奉るのであります。斯様に我國民の 皇上奉戴の觀念は萬世無窮實に抜くべからず、動かすべからざる強さと重みを有つて居ますから、永き二千五百八十餘年の星霜を経る間には、幾度か盛衰の跡はなきにしもあらずと雖も、根本の基調には何等變る所なきのみならず、明治維新以來 皇徳益々其の光輝を發揚し、臣民亦能く 皇恩の廣大なることを感荷し、彼の 皇恩の萬一に報答し奉らんことを期すること萬人皆一であります。げに老も若きも此の大和魂のみは一つであつて、凝然一致何處までも盡さう、身命を擲つまでと誓ふのは、學者も非學者も物知りも知らぬものも皆同じことであつて、此の魂を持たないものはないのである。

斯様に我 皇上を殿堂に於ける柱の如く大切にし且つ御親とし君皇と仰ぎ奉る根本の由つて來る所は、彼の義は君臣なれども情は親子の如しと、詔らせ給うた慈仁の恩澤より來つて居るものであつて、此の慈仁の潤澤は世々變ることなく、深くく國民の心頭に注がれ來つた結果である。従つて我國民より此の大和魂の一つを取り去らうとしても決して取り去ることは出來ない。結局生命を投げ出すと云ふことに至つて始めて止むのであります。

已上述べたるが如く我國民の 皇恩奉戴の精神は、彼の佛陀世尊の四恩の一として教へられた義趣と全く同一であつて、彼の心地觀經に説かれてある、皇上は殿堂に於ける柱の如しと御示しになつて、皇上奉戴の國民精神を御勸導になつて居るのは、全く我日本帝國に於ける國

民精神の教養を教へられたものであると見て然るべきであると存ぜられます。

どうか皆さん、皇上は殿堂に於ける柱の如しと云ふ金言を深く、自己の頭腦に感銘して、皇恩奉戴の道を大切に心得られたい。

四、三寶の恩

三寶とは佛法僧の三つの寶を尊敬することにて、こは佛教々團の最も大切なことであります。處で此の三寶の中、僧は法に依つて生れたものであつて、従つて此の法の尊いことを知つて法に歸依するのであります。そして法は何處から生れて來たかといへば、佛より生れて來たのであるから、其の法の根源たる佛は實に至尊であります。そこで其の究極する所は佛と云ふ寶の一つに歸するの外はない。こゝを我西

山には三寶即念佛なりと教へられてある。彼の彌陀の大悲を受け入れてありがたうと歸命合掌したそこに三寶歸依の姿の顯はるゝことは觀經第七觀に

見無量壽佛已接足作禮白佛言世尊我今因佛力故得見無量壽佛及二菩薩未來衆生當云何觀無量壽佛及二菩薩等

と説かれてあつて、彼の無量壽佛の佛寶を拜する時、そこに二菩薩の僧寶をも拜し、そして此の佛と僧との二寶を拜することを得るのは畢竟證得往生の領解の法寶より來るのであつて、そして其の歸する所は見無量壽佛接足作禮の外はない。つまり阿彌陀佛に手を合はすことが其のまゝ三寶歸依の姿であります。

處で前述の説明に依り三寶に歸依することは阿彌陀佛に歸依するこ

とであると云ふことは承知したであらうが、其の阿彌陀佛の攝取に預りて淨土へ往生するやうな廣大な御恩徳を報ずると云ふことは實に容易ならぬことであると思ふ。處で或は佛恩報謝と云ふことは念佛を稱ふることであるともいはれて居ますが、西山には云何やうに心得るのであるかと云ふに、此のことは別に説明して置いたからこゝでは止めて置きます。要するに稱名なるものは彌陀の大悲を信受して往生の一大事を領解した歡びの聲であつて、私の心中の歡びが溢れて南無阿彌陀佛と絶叫するに至るのである。そこでこれを御恩報謝であると云ふのは聊か受け取りにくいことである。さればどんなことが御恩報謝かと云ふに

善導大師は

自ら信じ、人をして信ぜしむることは難きが中の難いことではあるが、彌陀の大悲を普く一切に傳へて化益を施すことは眞に佛恩を報ずる道である

と仰せられてある。こは佛の御心は一切の衆生を導いて明るい佛の世界へ入らしめようとするのが最大の目的である。従つて此の佛の御心を理解した往生人の面々が、分相應に、親は子を導き、夫は妻を導き、兄弟朋友各々自己先づ自ら信じて佛の慈光に目醒め、そして人をも目醒めしめようとするのである。そは先づ第一自ら信仰の光りを持ちて止惡修善の道を踐み、人をも導いて、止惡修善の人たらしめよう。往生人といはるゝ人たらしめようと眞實に他を導くことのそれが、眞に佛恩を報ずるものであるとの御示しであります。

どうか皆さん眞個に信仰を體得し、そして世の悪化を防がう、迷へる闇の人を明るい道へ導かう、未來は共に一佛淨土の再會を約しませうと云ふ心地になつて下され、それが眞の佛恩報謝であります。そして此の佛恩報謝の道念はやがて、皇恩にも報じ、人の恩にも報じ、親の恩にも報ずる筋道を開くことになつて來るのであると云ふことを承知せられたい。

前陳の如く我信仰より來る四恩報謝の徳行は人間道徳の最も重要な事柄であつて、誰人も忘るべからざる教訓であります。

彼の平重盛が父清盛を諫むるに、世に四恩あり、皇恩最も重しと陳べて、父の非行を諫止せられたことは史の傳ふる所であつて、人の知る所であるが、今時文運興隆の世にありながら、往々四恩の名さへ知

らぬものゝあるのは、畢竟我佛教徒の家庭道徳社會道徳國家道徳世界道徳の教へに勉めなんだ結果であると思つて竊に慚謝する次第であります。どうか皆さん、信仰より起つて、四恩道徳の實行に勉められんことを。

二十三、六 度

菩薩の六度の行事と云ふのは、三聚淨戒中の攝善法戒に含まるゝ善行である。そして今は淨土教の戒體發得の上の正行としての六度の心得を語るのである。

如來の慈悲の光りに眼の覺めた人は皆菩薩と云ふ名の附く人であると云ふ事は度々申述べて置いた。既に菩薩の仲間入りをした人であれ

ば、そこに自ら分相應に六度の行事も具ふべき筈である。いかに具ふべきかと云ふに、先づ六度の次第につき、彼の聖道自力の方からいへば、行證として布施持戒忍辱精進の修行に依つて、三昧定力も成就し無漏の智慧も開發することゝなるのぢやが、これは上根大人の行方であつて、凡愚の我等に取りては到底及びがたきことであると思ふ。

處で淨土他力の上から行ふ六度は、解行と次第して、誰でも分相應に行ひ得らるゝのみならず、これを行ふことが人の本分であります。解行とは解は他力の領解、行は起行を意味したのである。こは自力の上で云ふ所の修行とは違つて、正行又は善行とて正しい行ひ、若くは善い行ひと云ふ程のことであつて、これに依つて大智慧を得ようの、大菩提を得ようのと云ふやうな希望ではない。ちやうど親に孝心の厚

い人は一切の作すこと皆孝行と云ふ善い行ひとなる、そしてそこには何等の望みはない。唯あるものは親を歡ばせたい心ばかりぢや。或る名高い孝行人の處へ孝行の仕鹽梅を尋ねに参つた人があつた。折柄息子は山へいつたと云うて母親のみ獨り家に居た。暫く待つて居ると、息子が歸つて來たので、母親はにこ／＼しながら、御客様が待ち受けて居るさあ早うと云うて、洗足の水を汲むやら、草鞋の紐を解いてやるやら大抵のことではない。息子は母親のなすがまゝに質直に受けて、やがて客に對面した。客は時の挨拶や世間話など語り合つたのみで、別に孝行の事は問はずして歸つたと云ふ話がある。皆さん客はどんな感じをして歸つたのでせう。こは親の心に叶ひさへすれば親に草鞋の紐を解いて貰ふのも、矢張親孝行であると云ふ實際の教訓を得たので

あらうと思はれます。これと同じ様に如來の慈悲の御心を受けて、其の御心に相應する様な心操を持つのが他力の領解ぢや。此の領解の心操から作す所の行事は布施でも持戒でも忍辱精進でも皆正行と云うて、信者として善い行ひであると云ふことになるのぢや。孝心あれば何事も孝行となる如く、正因他力の領解からは一切の行事皆正行となるのぢや。元來自力からでも他力からでも、行事其のものに變りはないが、心操に差ひがある。こゝを行觀上人は自力他力の心を取り替ふるばかりぢやと仰せられた。どうか皆さん如來の慈悲の御心を領納した心操より分相應に布施持戒等の善い行ひをなす人になつて貰ひたい。そは他力正因の領解より正行増進の人となるのぢや、それが其のまゝ安心より起行に立ち歸つた人と云ふのぢや、それが取りも直さず、

攝善法戒の行事と云ふのぢや。

さて淨土教は解行の次第であるから、六度に就いても少し順序の様を替へて心得て見るのがよいと思ふ。即ち六度の中最後の智慧より逆に順を逐うて心得るのが當を得て居ると思ふ

一に智慧

前に説明して置いた通り、觀門識知と云うて、如來の慈悲の謂れをよくよく聞き取りて、凡夫の出離解脱は彌陀の大願業力に託するより外に道なしと信知したのが領解の智慧ぢや。彼に喚び此に遣る大悲の御心を受け取つて、願生西方の思ひ立ちの出來たのが智慧を得たのぢや。六道流轉の愚ものが、淨土參りの賢い人となつた。冥きより冥きに入る凡夫の心中に、大悲攝化の光りが輝くと、やがて明より明に入

る人となる。即ち信仰の光りに依つて向上の一路を見出し、こゝに始めて佛の正道に安立する人となり得る、これが即ち大智者ぢや。皆さん常に住んで居る家の内にも、夜分に明りなしにはあぶなくて一歩も歩めない、實に不安の念に堪へられない。こんな場合に若しどこからか一道の明りを得たならどんな心地がするでせう。げに獨居の室にても、ほつとあかりを得た刹那に、安堵して、思はずにつこりと笑を湛ふるであらう。斯様に人は闇中に光りを得て安堵の思ひをなすが如く、生死の闇中にさまよへる凡夫が、佛陀觀門の開示に依つて彌陀大悲の御心を領解した心地を解脱の智慧を得たと云ふのであつて、此の生死を解脱する智慧の光りに安心安堵した状態は實に何ものを以ても比ぶべきものはない。そしてこゝが第二の禪定と云ふ心地に入る所

ぢや。

二に禪定

如來の慈悲の御心を領解して、往生の一大事に安心安堵した心地を禪定と云ふのである。こゝは

ねむりて一夜を明すも報佛修徳の内にあかしまめて一日をくらすも彌陀内證の内にくらす

と云ふ信仰の心理状態にて弘願大悲の一つに成り切つた絶對の歸命を意味したのぢや。こゝは所謂離機離教と云うて、機の自力も教の智慧も離れた、無一物の空手の状態にて、出離無縁の凡夫なりと自己の無能無力を認めた信仰の風情ぢや。斯様な安心證得の心中にやがて聖衆の現前を見る、それが信仰の禪定三昧の境ぢや。彼の韋提希夫人が

佛を見奉つて接足作禮したのは即ち心中證得の見佛である。さればいかなる凡夫も安心證得さへすればそこに聖衆の現前を見るのぢや。これが他力領解より來る禪定であります。所謂

心顛倒せず、心錯亂せず、心失念せず、身心に諸の苦痛なく、身心快樂にして禪定に入るがごとく、聖衆現前し給ふ

とある。證得往生の心中の境界ぢや。慈悲の御心をありがたうと受け入れておちつきの出來た風情であります。

三に精進

淨土教の信仰は未來永久に生きて働くべき遠大の希望を持つと同時に、現在に於いては止惡修善利生の掟に遵行する様、何處までも精進努力することを本分とするのである。それは願生西方の信仰に還來度人

の誓願を持つのである。此の誓願を遠き未來に待たずして、今其の一端の實現を期するのである。即ち安心より起行に立ち歸つて、止惡修善利生を事とするを信仰の歸趣とするのぢや。彼の常に唱へつゝある願以此功德の文でも、四弘誓願の文でも、畢竟現在未來を通じて利益衆生の爲めに奮闘努力しようと云ふ希望を陳ぶるのであつて、そこには自ら利益衆生を目的とする實行の伴ひ來らねばならぬ筈であるが、世には往々此の文を誦して意を解せざるものもあり、中には意を解しながら實を行はざるものや、甚しきは發願利生は菩薩の行事であつて、凡夫風情の企て行ふべきものでなきのみならず、それを事とするのは雜行である、雜修であると云ふ様な鹽梅に沙汰することを聞きて、譯もなく佛教の掟を紊亂し、従つて積極的菩薩の志氣を失ひて、次第次

第に消極的小乗の獨善主義に傾き行く風情のあるのは、實に道の爲めにも、將た國の爲めにも甚だ慨はしきことである。大體菩薩とて別に異なる人種のあるのではない、つまり慈悲の光りに眼の覺めた人のことぢや。そして其の眼の覺めた菩薩でなくてはならない人が、途方もない誤れることを云ひなすものぢやから、淨土教は厭世教ぢやの、人道教に適しないなど、云ふ様な評言も起るのぢや。そは全く淨土教の眞意義を知らないものゝことであるから且くこれを措く、處で我等の信ずる淨土教の信仰なるものは、未來永久に生きて働くべき希望を持つと同時に、現在に於ては止惡修善利生の掟に隨ひ、世の爲め人の爲めに精進努力するを本分とするのであつて、それを安心の上の起行の人とも、精進の人とも云ふのである。

四に忍辱

遺教經に

忍の徳たること持戒苦行も及ぶこと能はざる所なり

とあつて、佛陀の積功累徳の行事も一の慈忍力に依つて成就せられたのである。我が御佛の因位法藏菩薩たりしとき

假令身を諸の苦毒の中に止くとも我が行は精進にして忍びて終に悔いざらん

と仰せられた。御身は苦の中毒の中に置くとも、攝取衆生の大願は勇猛精進に勵んで成就せねば止まぬ。どんな辛いことがあつても、忍び堪へて行くぞとのことであつた。此の法藏菩薩の慈忍力に依つて、五劫永劫の長きに渉れる奮闘努力も屈せず撓まず、遂に淨土の建立も

成り、凡夫往生の道も開けて來たのである。

例をいへば、彼の信長は七八分までの堪忍は出來たがまあ二三分と云ふ所でならなんだ。一朝本能寺に於いて光秀の反逆に命を落したのも畢章これが爲めぢや。秀吉は二十年の間に天下を領し、榮達人臣の極に至つて終りを全うしたのは餘程堪忍が強かつたのであらう、が十全の堪忍ではなかつた。末に至り聊かゆるみが來た、驕奢に傾いた、天下は子孫に傳はらなんだ。家康は自ら天下を領し、且つこれを子孫十三代の後まで傳へたと云ふのは、彼れの遺訓に、堪忍は無事長久の基とある。所謂堪忍なるものが基礎をなして居るのであらうと思ふ。

彼の唐の張公藝と云ふ人は九代の間一族同居して居て、そして和順孝友の聲が高かつた。高宗帝の耳に達し、やがて左様に多數の家族が

仲善く暮らせるのはどういふ譯かと御下問になつた。これに對して公藝は、忍と云ふ字ばかり百程書いて差上げた、一字も外の字はなかつた。こは何十人何百人にても各々堪忍の忍の一字の意を守りさへすれば和合して行けると云ふことを意味したのぢや。堪忍は實に無事長久の基であります。されば我等如來の大悲を領納して永久に活きて働かうと云ふものは、是非此の堪忍が必須附帶の條件ぢや。特に堪忍と云うてもなまやさしい意味ではない。ならぬ堪忍するが堪忍であつて、罵辱毀辱と云ふ程の大侮辱をも忍受するのが信仰家の本分ぢや。光りに觸るゝものは身心柔順なりとあるのは信者の人格である。所謂目の覺めた人即ち菩薩としての忍辱は當然のことであります。

五に持戒

當流の持戒のことは前に説いて置いた戒念一味の意義を心得るのが肝要ぢや。要するに持戒とは報身如來の大悲の光明を凡夫痴闇の心中に領納して、各々分相應に三聚淨戒を實行することである。そして念佛とは覺他大悲の御心を凡夫の心中に領納して利益衆生の起行門に立ち歸つた姿である。そは戒とは大悲の光明のことにて、これを戒經には一戒光明とある。佛とは矢張大悲の實現した光明の體ぢや。つまり戒と云うても、佛と云うても其の實體は一つぢや。阿彌陀佛は畢竟三聚の戒身ぢや。處で戒經には戒の行事に關することを詳に説いて光明のことを略してあり、そして觀經等には光明のことを委しく説いて戒のことはほんの僅かにほのめかしてある。そは

若念佛者當知此人是人中芬陀利華

と説き、又

觸此光明身心柔軟善心生焉

と演べられてある様な鹽梅であつて、眞に大悲の光りを受くるを以て善心發動の根本として説かれてある。そこで我が一流の教旨は觀經等に依つて大悲の御心を味ひ、戒經等に依つて實行の規準を取り、ここに始めて眼の覺めた人とも、人の中の花ともいはるゝ人が生れてくることを教ふるのである。されば此の人はどんな風情の人であるかと云ふに、これまで幾度も説明して置いた止惡修善利生と云ふ三の掟に隨ふ人ぢや。和げていへば、悪いことをするな、善いことをせよ、人の爲めになることをせよと云ふ掟に従ふ人であつて、此の簡短な止惡修善利生と云ふ三語の中には佛道の掟も、人道の教へも皆含まれてあ

る。皆さんよくく教への趣きを味うて、人の中の花といはるゝ人たらんことを望みます。それが他力信仰より來る起行の人とも、持戒の人とも云ふのであります、それが眞個に信仰の光りある人であります。

六に布施

既に陳ぶるが如く持戒の人としては自ら布施の行事あるは當然のことぢや。それは利益衆生は信仰の歸趣であるから、一切の衆生に對して平等の慈心を發し、そして資財にても法寶にても、各々身分力量相應の施しをなすのはあたりまへのことぢや。然るに布施に就いて財施法施等のあることは前に説明して置いたから今は略します。處で世に檀那と云ふ通稱語がある。こは印度の語であつて、譯して布施と云ふのぢや。元來信仰の上より世の爲め人の爲めに資財を施し、又信仰を以

て人を導くなどを總じて檀那と稱する、即ち施すことぢや。彼の檀那と云ふのは矢張檀那のことにて、寺の造立經濟維持等に就いて相當の資財を提供する人は所謂檀那ぢや。それが多人數の集團であることを意味して檀那中、略して檀中と云ひ來つて居る。つまり寺を持ち立てて行く施主ぢや。又寺を檀那寺と云ふ。これも檀那の寺即ち施主の寺と云ふことでもあり、又寺を檀那とも云ふ。そは寺は法を説いて人に施すから檀那寺ぢや。住職は法を施す檀那ぢや。斯様に檀那と云ふことは信仰より來つた財施法施の人に名けたものであるが、それを濫用して、金満家も檀那、主人も檀那、宿屋の客も檀那、車に乗る人も檀那、藝者買も檀那、妾持も檀那と云ふ様に、檀那の名が頗る濫用せられて居ますが、何れも施主と云ふ意味はないでもないがそれは別とし

て、佛教よりいへばすべての人皆檀那たらんことを望むのである。先づ寺の住職は檀中に對して法を施す檀那たることを期し、檀中は寺の維持經濟に不自由なき様資財を施す檀那たることを要し、一家の主人は全力を傾けて家族の爲めに盡す檀那たるの價を持ち、家内は主人を助けて子弟を成育せしむる爲めに全力を注ぐ檀那たり、子弟は親に對して安心を與ふる様な心掛けと、身持を大切にして親に満足を與ふる様な檀那たるを要し、兄は弟を慈愛し、弟は兄をいたはり、姉は妹を可愛がり、妹は姉を大切にして、相互に親切の遣り貰をするのが、やがて相互に檀那といはるゝ價がある。其他親戚朋友より町村又は國家に對して、常に何か爲めになることをしたいと云ふ心懸けの誠意より貢献するものは、それ等對象の各々より皆檀那といはれ、且つ友達か

らも、町村からも、又國家からも、各々檀那といはるゝ様な人たらんことを望むのが我が布施と云ふ教への趣意である。

以上六度と云ふことにつき、入信の順序として第六の智慧より、順次逆に逐うて説明しましたが、既に六度の意義を心得て見れば別に前後はない。又心得た上からは六度の全部を實行する人もあらうし、其の中の二三を行ふ人もあらうが、畢竟其の人の能不能に應じて各々出來得べきこと丈のことをすればそれでよいのであつて、それが皆菩薩と云ふ仲間の人の振舞であります。どうか皆さん信仰に目の覺めた人として六度の實行に力められんことを切望いたします。眞個に彌陀大悲の光りに目醒めた人であつたなら、どんな人でも、皆菩薩と云ふ仲間に入るのであります。従つて此の菩薩といはるゝ人の思想觀念のそ

ここに自ら六度と云ふ行事の色は現はれて來ます。一寸の草にも五分の春の色であつて、所謂安心より起行へと云ふ道の光りであります。

二十四、四弘誓願

佛教信仰の目的は元來自己の成佛を期すると同時に、利益衆生を歸趣とすることは聖道淨土共に同じことである。が彼れは即身即佛と語りて、娑婆即寂光淨土の義趣を説き、此れは願力往生の法を教へて、別指西方の出要を示すのであつて、其の目的を達する行き方に於ては二者各々道を異にすと雖も、正しく信仰に入つて行事の上に顯はるゝことのそれは共に利益衆生の外はない。そこで聖道にも四弘を説き、淨土にも四弘を教ふるのであるが、所詮四弘とは信仰より來る利他行

に就いて、四つの願求あることを示したのである。大體佛教信仰の其處には必ず利他の願求を持つのは聖道も淨土も同じことであつて、それが佛教信仰の特色とするのであります。

今先づ多くの人の知つて居る三五の例を擧ぐれば、馬鳴菩薩の起信論に

盡十方の最勝業の徧知色無礙自在救世大悲者、及び彼の身の體相の法性眞如海、無量の功德藏、如實修行等に歸命す

と述べて三寶に歸依する信仰を語り、終りに

諸佛甚深廣大の義、我今隨順して、總持して説く、此の功德の如法性を廻して普く一切衆生界を利せん

とある。是れ即ち三寶に歸すると同時に利益衆生を歸趣とすること

を教へられたのである。又世親菩薩の唯識三十頌の初めに、
唯識の性に於て滿と分と清淨なる者に稽首す。我れ今彼の説を釋
し、諸の有情を利樂せん

とあり、終りに

已に正教と及び正理に依つて、唯識の性と相との義を分別せり。
獲る所の功德を以て群生に施し、願はくは共に速に無上覺に登らん
とある。是れ亦信仰と利他の義趣を述べられたのである。次に淨土
教の例を擧ぐれば、龍樹菩薩の十二禮に

天人の恭敬する所の阿彌陀仙兩足尊に稽首す。我れ今彼の尊の功
徳の事を説く、衆善無邊にして海水の如し、獲る所の善根清淨なる
者、衆生に廻施して彼の國に生ぜん

とあり。又天親菩薩は

我れ論を作り解を説く、願くは彼の尊を見上り、普く諸の衆生と
共に安樂に往生せん

と述べ給うてある。特に善導大師は、御疏の立義十四行偈の初めに

先勸大衆發願歸三寶

と擧げて信仰を表し、終りに

願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國

と述べられてある。そののみか禮讚文の一偈一偈に、南無至心歸命
禮と信仰を述べ、句の終り毎に願共諸衆生往生安樂國と置かれてある。

此等列祖聖訓の一端に依つて見ても、聖淨二教に於ける信仰の歸趣
は利益衆生にあると云ふことは明白なことである。従つて我淨土家に

四弘誓願の文を唱ふることも亦意義のあることにて、今少しその義趣を説明して見よう。

四弘誓願文の前四句は天台より出で、自他法界以下の二句は惠心僧都の往生要集の唱導より來つたものであつて、同じ四弘を説いても、聖道と淨土との意得に相違あることを御示しになつてある。

要集の意に依れば、四弘誓願は、菩提心を以て本とするものなりと説かれてある。即ち集に云く

淨土論に、發菩提心とは正しく是れ願作佛の心なり、願作佛の心とは即ち度衆生の心なり、度衆生の心とは即ち是れ衆生を攝受して佛の國土に生ぜしむる心なり、今既に淨土に生ぜんと願ず、故に先づ菩提心を發すべし。乃至當に知るべし菩提心は是れ淨土菩提の綱

要なり

と、そして願作佛心とは之を總じていはゞ、上求菩提下化衆生と云ふことであり、別しては之を四弘誓願と云ふ。

四弘の一は衆生無邊誓願度と云ふことにて、一切衆生に悉く佛性あり我れ皆菩提涅槃に入らしめんと誓ふのである。この心は即ち是れ三聚淨戒中の饒益有情戒にて、即ち利生心と云ふ心地であつて一切衆生に利益を施し、佛果菩提の樂境に至らしめようとする誓願である。この誓願は衆生濟度の慈心の發動であつて、三徳の中には恩徳の心と云ひ、三佛性の中にては緣因佛性と云ふ。こは一句聞法の小緣に依りて、佛道修行に入る緣に遇ふことを意味するのである。斯く佛性所具の人々に對し、假令一句の法なりとも聽かして因縁を植ゑつけ、や

がて佛果菩提を得るの道に導いてやりたいと云ふ願心を發すのである。そして此の願心に依つて積まれた功德はやがて應身菩提の因となると示されてある。應身とは應化身として所化の衆生の機に應同して現はる、佛のことを指すのであつて、我釋迦牟尼世尊の人類に應同して、御身を此の世界に現じ給うた類を應身と云ふのである。斯様な大きな願心を持つのが菩薩の佛道を行ずる第一の誓願である。

二に煩惱無邊誓願断とは、一切衆生に皆佛性なるものを具して居る。けれども惜いことには我等衆生は恆沙無邊の煩惱の爲めに禍ひせられて、折角の佛種も生ひ立つことが出来ない。處で斯の如く彼の恆河の砂にも比し、塵の數にも喩へらる、程の數限りなき多くの煩惱をも断じ盡したいと云ふ大きな願ひを發すのであつて、そして此の誓願は、

三聚淨戒の中には攝律儀戒と云うて止惡の實行を事とし、三徳の中には斷徳と稱して、勇猛精進に罪惡の退治に努力するのである。處で萬法は元來因縁和合より生ずるものであるのみならず、善惡元來是れ同體であつて、そこには何もの、隔つるものもない。悟つて平等の慈心に住し、そしてそれがやがて、正因平等の佛性を意味し、法身菩提の因であるとして云ふのである。正因佛性とは、一切衆生悉有佛性と云うて、煩惱具足の衆生に本來佛性なるものを有つて居る。そは佛に成るべき種を有つて居ることを正因と云ふのである。

法身とは我れ自身を始め、法界森羅の萬象そのまゝの實相を佛性顯現の姿であるとするを意味するのである。斯様に無邊の煩惱を断盡し、眞の法身の實相を見せしめようとする願求を煩惱無邊誓願度と

云ふのである。

三に法門無盡誓願知とは、聖道八萬の波羅密を證悟せる智光を體得し、從つて無限の慈心を發し、諸の衆生を視ること自己の若しと云ふやうな平等觀に住して、一切の衆生に利益を施すのである。そしてこは三聚淨戒中の攝善法戒と云ふ修善の行事を勵行し、三德の中には智德を磨き、佛性の中にては、了因の智光を意味するのである。智德とは萬德圓滿の光りを持つことであり、了因とは我れに本來佛性ありと了知する智慧の働きを云ふのである。そしてそれがやがて報身菩提の因となると教へられてある。報身とは衆生濟度を目的として積功累徳せられた其の德に酬うて正覺を成じ給うた佛を指すのであつて、彼の阿彌陀如來の如き御佛を意味するのである。

四に無上菩提誓願證とは、こは至極究竟の佛果を願求するのであつて、前の三願漸く成就して今正しく法報應の三身圓滿の佛果を證得し、其處に更に還つて亦廣く一切衆生を濟度しようとする期待を持つ心地を語つて居る。其處を法門無盡誓願知と云ふのである。

以上四弘の説明の終つた處にて、集主惠心僧都は斯様に仰せられた。

四弘已つて後に

自他法界同利益、求生極樂成佛道

と唱ふべしと、こは誓願の心中に我れ衆生と共に極樂に生じて前の四弘願を圓滿し究竟せんと念ずべしとのことである。此の終りの二句は正しく聖道に異なる淨土家の四弘の實踐振りを指示せられたのである。

そして大丈夫論の偈の

悲を以て一人に施す功德の大なること地の如し、己が爲めに一切に施すは報を得ること芥子の如し。一の厄難の人を救ふは餘の一切の施に勝れり、衆星は光りありと雖も一月の光りには如かじと擧げ、以下淨土教に依りて利他の行事を修する意義を示されてある。そは

自利の行是れ菩提心の所依に非ざれば報を得ること亦少し。云何ぞ獨り速に極樂に生ぜんと願するや、答ふ豈に前に言はずや、極樂を願ふ者は要す四弘願を發して、願に隨うて勤修すれば此れ豈に是れ大悲心の行にあらずや、又極樂を願求することは是れ自利心にあらず。然る所以は、今此の娑婆世界は諸の留難多し、其の露未だ沾は

ざるに苦海朝宗しぬ、初心の行者何ぞ道を修するに暇あらん。故に今菩薩の願行を圓滿して、自在に一切衆生を利益せんと欲するが爲めに、先づ極樂を求むるなり。自利の爲めにせず、十住毘婆沙に云ふが如く、自ら未だ度することを得ずして彼を度すること能はず。人の自ら淤泥に没らんが如きは何ぞ能く餘人を極濟せんと、故に又水の爲めに漂はされたるもの、溺るゝものを濟ふこと能はざるが如し。是の故に我れ度り已つて當に彼れを度すべしと、乃至十疑に言く、淨土に生ぜんと求むる所以は一切衆生の苦を救ひ抜かんと欲ふが故なり。即ち自ら思付すらく、我れ今衆生を濟ふ力なし、若し惡世煩惱境の中に在りては、境の強きを以ての故に自ら纏縛せられ、三途に淪溺して動もすれば數劫を経ん。此の如く輪轉すること無始

より已來未だ曾て休息せず、何れの時にか能く衆生の苦を救ふことを得ん。これが爲めに淨土に生じて諸佛に親近し、無生忍を證して方に能く惡世の中に於て衆生の苦を救ふことを求むるなり

と、以上の説に依れば、凡夫の弱者が此の娑婆に居て四弘の行事を修することは到底堪へ難きことである。そこで極樂淨土へ生れて無生を證り、自ら強者に成り得た上に苦の衆生を救ふことに取り懸るのが其の道を得たものであると信じた。其處で今淨土の往生を求むるのは畢竟利益衆生を目的とするのであつて、全く自利の爲めではないと云ふのは要集の往生觀である。

こは源、淨土論の意を得て、往相廻向より還相廻向に出で、利益を事とする意義を語つて居るのである。處で遠き未來の利他はさもあらばあれ、今眼前に水に溺る、凡夫のあるを云何にするか、我れ濟ふに力なしとして傍觀し得らるゝであらうか、或は及ばざるまでも應分の手を盡し得べきものであらうか、これに對して予はこゝに西山國師の御教訓を提供して答辯に代へようと思ふ。國師の語に

往生を願ふと云ふは衆生を利益せんが爲めにてある。故に往生を願はん人は諸の衆生に於て父母の思ひをなして哀みの心をいたし、方便をめぐらして利益を先とすべきなり。是れ即ち諸佛の御心に相叶ふものなり

と、こは安心領解の其處に往相廻向の證得を開き、やがて起行の立場に立つて還相廻向の色を顯はす心地を御示しになつたのである。要するに往生を願ふ目的は何にあるかといへば四弘誓願の利益衆生に在

る。既に往生の目的が利益衆生にあるものとせば、差當り慈心相向佛眼相看と云ふ心懸けを以て四恩に報答し、四攝を實行するやうなことは最も麗はしい行事であつて、それが取りもなほさず御佛の心に相叶ふものといはるゝ利他行である。

又國師の仰せに

彌陀をたのむ心深くなりぬれば、彌陀所有の功德を學び顯すこと淨土に生れてなすべきをかつゝ穢土にて習ひ修して、惡をば退き善には進む心を遣ひて一善をも修し、一惡をも止めて淨土に生ぜんと廻向する即ち廻向を一にするにてあるなり
と、こは安心證得の上の起行に立ち出でた止惡修善の行事であつてやがて四弘の利他行である。そしてこは現生即便往生と云ふ領解のそ

こに開けて來る還相廻向の姿を意味したのである。彼の淨土に生れたる後、更に還り來つて衆生を利益することは遠き未來の還相廻向を説いたのであるが、今國師の語る所は、近き現生に於ける還相廻向である。言はゞ信仰に目醒めて、惡人が善人と生れ變つて來た状態を意味するものにて、此の場合まだ佛になり得たのではないのであるが、彼の佛の大悲の光りを領納した信念の其處に起つて働くことのそれが、或は止惡となり、或は修善となり、利生となつて顯はれて來た現生其のまゝが還相廻向と云ふ意義を持つのである。此の意味に依り、我家にては常に安心より起行へ、正因より正行へ、信仰より實行へと云ふことを教へて四弘の利他行を獎勵するのである。處で凡夫の我等としては、素より思ふ所の一分も實行は出來ない。其處で特に彌陀の

大悲を仰ぎ、やがて淨土へ往生して正しく究竟の佛果菩提を得たる後の利他を期待しながら、先づ／＼今は今の分相應に惡を止め善を修して世を利し人を益しようとするのが我等が佛陀の光りに觸れて發る所の善徳であつて、それが佛陀の御心に相叶ふ行事であると確信するのである。

以上我家に四弘誓願を説き、利他行を唱道する所の意義の大要斯の如くである。

二十五、四 攝

四攝とは布施愛語利行同事と云ふ四つのことにて、此のことは智度論第六十六の卷に

諸の菩薩は菩提心を起し、多くの衆生を安穩にし、無量の衆生をして樂を得せしめ、諸の天人を憐愍し饒益するが故に、是の諸の菩薩は、菩薩道を行ずる時、四事を以て無量百千の衆生を攝す。所謂布施愛語利益同事なり(利益と利行とは同じ意味である)

とありて、四攝を菩薩の利益衆生の規準とせられてある。これを善導大師は玄義分に

但し以みるに垢障覆ふこと深ければ淨體顯照するに由なし、故に大悲をして西化を隠し驚いて火宅の門に入り、甘露を灑いで群萌を潤し、智炬を輝かして重昏を永夜に朗ならしむ、三檀等しく備へ、四攝齊しく收めて長劫の苦因を開示し、永生の樂果に悟入せしむとお示しになつてあります。要するに釋迦牟尼世尊の利益衆生の行

事も四攝に攝し、菩薩利生の行事も四攝の外には出でない。従つて我等彌陀の大悲に目醒めて、起行門に立ち歸つた人の行事の掟も矢張四攝の外には出でないのである。處で聖道の自心自佛と悟つた人も、彌陀の大悲に目醒めた人も、行事の規準は同じことである。彼の聖道の菩薩と、我等凡夫とは元來智慧力量を同じうするものではありませんから、自然行事の程度の異なることは無論のことである。けれども其の志とする所は利益衆生の外はない。そこで聖道の大菩薩は大菩薩の智慧力量相應に四攝を實行し、彌陀の大悲を仰ぐ凡夫は凡夫相應に四攝を實踐するのであります。そこで先づ我淨土教信仰より來る實踐の規準たる四攝のことを語つて見よう。

其の一、布施

布施とは物を施すとか、教へを施すとか云ふ場合に出し惜みをするやうな心地を離れて、普遍平等に、對象のそれを利益しよう、満足せしめようとする心地に住するのが布施の大體である。此の布施につき、財施法施無畏施と云ふことのあることは前にも説明して置いたが、更に今簡短にこれを語つてみよう。

先づ布施の一は財施とて、金錢物品などを以て人を救助することや、社會學校社會事業等の公共の事業に對し應分の物資を提供し、又救貧救療などのことに應分の資財を援助することなどをすべて財施と稱するのである。

それから法施と云うて、説教、法話、講義、講話等、すべて人を善道に指導する教化事業などのことを意味する、そは人に智識を施し、

信仰を獲得せしむるやうな智慧を施すことを意味するのである。

次に無畏施とは畏れなき施しと云うて、人に安心を與ふることである。彼の神佛を信ずるものは、どんな怖ろしい場所場合に臨んでも、何等恐怖の念を懷かないのは、畢竟神佛の蔭となり、日向となつて御護り下されて居ることを信ずるからである。げに佛陀威神力の冥護に依つて、信者の心中に怖畏の念を除くと同時に、自然安心安堵せしめらるゝやうな大きな力を與へ給ふことを佛陀の無畏施と云ふ。言ひ換ふれば佛陀大悲の偉力に依つて、衆生に安心安堵を與へ給ふことを無畏施と云ふ。そは大悲の力に救はれて、何の畏れもなく安心安堵してたやすく淨土へ往生することの出来るのは全く彼の大悲の施しに依るからである。そこで此の佛の慈悲の施しを無畏施と云ふのである。從

つて此の無畏施を信受するものは、やがて我れ自ら此の慈心に住して無畏の施しを爲す人となり得るのである。

先づ爲政者は彼の佛陀より受け得た慈心に住して、國民に大なる安心安堵を與へなくては、眞の國家興隆の光輝を放つことは得られない。宗教家は自ら信仰の導首となり、徳の輝きとなり、そして他をして信賴せしめ、安堵せしむるものでなくてはならない。教育者は學徒に安心を與へ、安堵せしめ、教養せしむるの施しを爲すを以て本分とし、又親は子を安心安堵せしめてそこに立身の道を與へ、子は第一身持を大切に、親に安心を與へ、夫は先づ己れを正しうして妻に安心を與へ、妻は亦己れを正しうして夫に安心を與へ、店主は店員に安心を與へ、朋友知己は朋友知己に安心を與へ、其他會社團體等の集團のす

べての人が、各々他に對して慈心の光りを與へ、相互に心の底まで照し合ひ、相互に何等害心を持たないのみならず、利他の心地に充ちて居ると云ふことを知らしむるまでに安心を與ふるに至つたなら、それ等すべての集團は平和であり、安心安堵して相互の福利を増進することとなるであらう。げに吾人の信仰がこゝまで増進すればそれが實に理想の實現であります。どうか彌陀大悲の光りに觸るゝもの相互に無畏の施しを爲し、相互に安心の與へ合ひを爲すやう勉められたい。

二に愛語

愛語とは和顔愛語とつゞく文字である。そして和顔も慈心より發露し、愛語も慈心より流露し來るのであつて、本願の文に、

如來の光明に觸るゝものは身心柔輦なり

とある。柔輦とはやさしい心、うるはしい姿を意味して居る。それは如來の慈悲の御心を領納して居る人は自然言ふこと行ふことがやさしいうるはしい光りを持つと云ふことである。されば信者たる者は、如來の慈心に基き、眞實心中より愛語の發露し來るやう其の徳性を涵養し、常に其聲、其の行ひに慈愛の意味を含むことに努むるのが大切ぢや。若し信者にして妄りに暴言を吐いたり、悪口悪言を吐くやうなことがあつてはならぬ。古人は

容貌辭氣は徳の符なり

とも申されてあつて、内に包まれてある徳の光りは屹度外に現はれて、道徳的行爲に見え來るは當然のことにて、彌陀の大悲を信受した徳の光りは、和顔となり、愛語となつて顯はれて來る。若し然らざれ

ば正覺を取らじとの御誓ひに基く信仰ぢやもの、いかでか心も行ひも麗はしい人にならずに居られませう。それは和顔愛語の人とならずに居られない譯ではありませんか。

三に利行

利行とは利益衆生の行事と云ふことであつて、信仰の上からは、何事を企て、も、何事を作すにしても、其の歸する所は、世の爲め人の爲めになれかしと云ふことを本心の出發點として實行することが主眼であらねばならぬ。それは彼の四恩でも、六度の行事でもすべて皆利益衆生を目的として行ずるのである。特に我信仰の上の行事としては常に願共諸衆生往生安樂國と祈り、大悲を傳へて普く化するのは眞に佛恩報謝の行事であると信じて利他の爲めに勇奮するのが我家の心得である。

る。

四に同事

世に同情と云ふ語は廣く使はれて居るが、同事と云ふ語の廣く使はれて居ないのは甚だ遺憾なことである。同事と云ふことは、彼の和光同塵と云ふ心地であつて、火の中水の中へも飛び入つて世を救ひ人を助けようとする慈悲の行事である。地藏菩薩の身命を投げ出して六道の有情を化益し、觀音菩薩の身を三十三身に化して五道の衆生を化導し給ふことなどは皆此の同事行と云ふことであるのぢや。彼の地藏菩薩の地獄に入つて、罪人と共に苦を受けながら罪人に慰安を與へ、又觀音菩薩の身を三十三身に分ちて衆生を利益するに、或は出家となりて出家を導き、或は道士となりて道士を導き、或は官人となりて官人

を導き、或は商人、農夫、工夫、漁夫、馬丁等となりて、それ等の人々を利導し、又或は處女、寡婦、童男、童女となりて、それ等の人々を善誘善化するやうな行動をすべて同事行と云ふのである。こは所謂和光同塵と云ふ慈悲の行事であつて、我佛教にて目の醒めた菩薩と云ふのは此等熱烈なる慈心より奮ひ起つて世の爲め人の爲めに、一身を投げ出して働く人のことを云ふのである。

世の社會的救濟事業に働く人は、多分此の菩薩といはるゝ人であると思ふ。従つて今後益々同事行的慈心に富める人々の多く出で來らんことを望む次第であるが、獨り此等特殊救濟方面の人の輩出を望むのみでなく、我家庭の人としても、社交界の人としても、國民としても、又世界的に働く人としても、すべて慈心より發る同事行的行動を取る

やうな、眞面目な人格者の多く生れ出でんことを望んで止まない次第である。

以上説明した布施愛語利行同事の四攝は我佛教の主義たる利他行と云ふ意義の一端を擧げたのであるが、要するに佛教なるものは、遠くは佛果を期し、近くは利他的な人格者、即ち菩薩と云ふ實行的目的を醒めた人を造るのが目的であると云ふことを心得られたい。特に我西山一流の信仰を持つ人は、安心より起行に立ち還つて、四攝實行の人たらんことを期せられたい。

信仰と實踐終

本書執筆に着手せられて間もなき去る一月十日特請に應じ、愛知縣成岩町常樂寺庫裡新築落慶法會に親教の際、本書發刊の企圖を洩らされたるに同寺住職中村僧正は痛く此の舉を翼賛せられ、僧正が先年烏有に歸したる同寺の復興事業に着手せられ、従つて檀信徒の熱烈なる同情の下に第一期大工事竣成を告げたるは全く佛祖の冥助に外ならざることを感謝し、此の際何か社會的に貢献して報恩の意を表したき希望ありたる折柄、忽ち本書刊行費の寄贈を申出られたるが、偶々同寺檀徒竹内花子女史が此の美舉を傳へ聞き、平素歸依淺からざる法主猊下の執筆せる本書の發刊を歡び、亡夫及び亡嬢の追薦の爲に刊行費の内へ若干の金圓を奉納せんことを申出られたれば、遂に此の篤志を容れて茲に發刊することゝ爲しぬ。斯く純眞なる真心より刊行費の寄贈を受けたる欣快をこゝに附記して其の芳情を謝すること斯の如し。

昭和三年六月五日印刷
昭和三年六月十日發行

信仰と實踐

定價金壹圓五拾錢

不許複製

著者 關本諦承

發行者 吉峰善亮

印刷者 田中源太郎

印刷所 文榮堂印刷部

京都府乙訓郡乙訓村粟生

淨土宗西山光明寺派教學部

振替穴版五四九六一番

發行所

終